

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 114 年)



京都の祇園祭り (左) のルーツと言われるオディシャ州、ヒンドゥー四大聖地の一つ、プリーのジャガンナート寺院のお祭り “ラタ・ヤトラ (山車に乗った神の行進)” (右)

*写真提供: [祇園祭り]平林博 日印協会理事長、[ラタ・ヤトラ]西本達生 事務局長

目次

- 1. 2016 年度決算 評議員会・理事会…………… P. 3
- 2. 聖なる奇祭ラタ・ヤトラと祇園祭を考える旅…………… P. 6
- 3. インドニュース (2017 年 6 月)…………… P. 14
- 4. イベント紹介…………… P. 17
- 5. 新刊書紹介…………… P. 23
- 6. 掲示板…………… P. 26

1. 2016 年度決算 評議員会・理事会

The Board Meeting of the Trustees and Directors

2016 年度(2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日)に公益財団法人日印協会が実施した事業活動と決算報告は、去る 6 月に理事会ならびに評議員会に上程、慎重な審議の結果、承認されました。また、評議員会では、退任する理事 1 名の後任を選任いただきました。



I. 理事会

2017 年 6 月 2 日(金)15:00～16:00、国際文化会館にて開催しました。出席予定だった森会長は急な公務のため欠席されました。18 名中 12 名の理事ならびに 1 名の監事が出席。その他、オブザーバー 1 名と事務局から 3 名が出席しました。

理事会の議案

<決議事項>

第 1 号議案: 「2016 年度事業報告(案)」の承認の件…下記ご参照。

第 2 号議案: 「2016 年度決算報告(案)」の承認の件…下記ご参照。

第 3 号議案: 評議員会招集(6 月 19 日)の件…(省略)

<報告事項>

第 4 号議案: 「会員状況」の報告の件…下記ご参照。

第 5 号議案: 「人事異動」の報告の件…下記ご参照。

第 6 号議案: その他

◆第 1 号議案: 「2016 年度事業報告(案)」の承認の件…下記の内容を報告し、審議の結果、承認されました。

一般概況

日印両国の関係は昨年 11 月のモディ首相訪日にあたり、「日印戦略的グローバル・パートナーシップ」から「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」へと格上げされました。共同声明において「日印ビジョン 2025 特別戦略的グローバル・パートナーシップ: インド・太平洋と世界の平和と繁栄のための協働」として、日本側から提唱された「自由で開かれたインド太平洋戦略」と、インドのアジア戦略としての「アクト・イースト」とを融合して、両国の戦略的な協力を地政学的に太平洋からインド洋、そしてアフリカにまで広く連携していくことが表明されました。

また同訪日中に、インド国鉄によるムンバイ・アーメダバード間の新幹線建設計画の工期を 2018 年着工、2023 年開業を目指すことが確認され、長年の懸案事項であった日印原子力協定については、「原子力の平和的利用に関する協力協定」として正式に署名されました。NTP に加盟していないインドではありますが、既に各国との平和利用目的の原子力協力が可能になっていることを踏まえ、我が国としてはむしろ核兵器廃絶や核軍縮のため

の国際的枠組みを早期に構築する上でインドとの協力を推進することにしたもので、協定は「核実験は行わないというインド側のモラトリアム宣言」を前提としております。

我が国としてこういったインドの国家インフラの発展への貢献が取り上げられると同時に、他方では人材育成や人材交流の分野で具体的な提案合意がなされ、日本企業の協力により「ものづくり学校」を3校設立し、10年間で3万人の人材育成をはかることが新たにうたわれました。技術協力分野においては、宇宙・海洋研究について政府関係部局間で覚書が締結されるほか、観光振興や人的交流のためにビザ申請窓口の大幅増加やビザ発給の緩和措置など、ソフト分野での協力体制も着実に構築されています。また日本企業向け工業団地のさらなる支援ならびに、投資インセンティブの導入なども共同声明で取り上げられ、インド国内におけるGST導入への着実な進展とあいまって、ビジネス投資環境の改善がますます進むものと考えられます。ほかにも防衛協力、気候変動への対策、テロ対策、あるいは国連安保理改革など、世界が直面する諸課題の解決のための両国の協力強化が確認され、日印関係は新たな時代を迎えてさらに具体的に拡大・深化していくことが期待されています。

以上のような強固な日印関係の発展とともに当協会として2016年度は、特にモディ首相訪日の機会をとらえ、森喜朗日印協会会長、平林博同理事長、笹田勝義同常務理事が11月11日(金)に宿舎の帝国ホテルに表敬訪問し、日印間の民間外交における協会の重要性をモディ首相他インド代表団および内外に示すことができました。さらにモディ首相離日直後の11月15日(火)には国際文化会館に於いて、全行程に同行された外務省南部アジア部長梨田和也氏をお招きして『モディ首相訪日の概要と成果』と題した講演会を主催いたしました。

事業活動

当協会は、日本とインドにおいて両国の友好親善と相互理解の増進のために5分野で公益事業を行うことを定款で定めています。2016年度実施した事業及び活動について事業活動記録を基に以下に付き詳細を説明しました。

- 1、評議員会及び理事会の開催
- 2、協会機関紙「月刊インド」の発行（年間10回）
- 3、Web版季刊誌『現代インド・フォーラム』の発行（年間4回発行）

2015年9月に協会内に発足させた「現代インド研究センター」は2016年度を通して、インドに関する調査研究活動をより活発化させるとともに、『現代インド・フォーラム』の質的向上のため、より専門的な編集企画、執筆者の推奨・選定ならびに論文原稿の審査(査読)、校正などの活動を行う。ひいてはわが国のインド関連の調査研究活動の活性化に貢献し、学者、研究者、実務家などとの交流が深化・拡大し、当協会会員や『現代インド・フォーラム』読者に今まで以上により広く深い情報提供が可能になることが期待されます。

- 4、協会主催及び共催の公益事業の他に、常勤役員による外部でのインド関連講演会、協会事務局によるインド出張、多数のインド関係の催し物に対する後援をし、イベントに参加しました。主な事業は次の通りですが、各事業は機関紙「月刊インド」等で紹介しました。

- ①<様々なインド>第40回「日本人初のIIT生が語るインド風情」
- ②会員交流会 年2回（7月、2月）
- ③第24回ナマステ・インディア2016 日印協会主催講演会（9月25日）
 - ・『インドを走る！ムンバイからカッチ砂漠まで』古賀義章氏（日印協会会員）
 - ・『入試倍率100倍のインド工科大学（IIT）の学生たちは日本をどうみるか』山田真美氏（日印協会理事）
- ④講演会『モディ首相訪日の概要と成果』外務省梨田南部アジア部長』（11月15日）

- ◆ 第2号議案：2016年度決算報告書(案)の承認について・・・決算報告書（正味財産増減計算書）に基づき以下のような説明をし、承認されました。

収支状況について

収入（経常収益）は前年度実績 28,962,769 円に対して約 163 万円減、また事業費（経常費用）は前年度実績 28,341,489 円に対し約 52 万円減となりました。収支差額は前年度実績のプラス 621,280 円に対し、当該年度は 485,922 円の赤字となりました。

収入減の主な理由は、受取り会費減（約 94 万円）と事業収益減（約 66 万円）であります。事業収入減の中身は、2016 年度は交流会収入が前年度約 175 万円に対し、約 53 万円（約 122 万円減）にとどまったこと、他方で講演会収入・機関紙広告収入などで対前年約 62 万円増となり、他のも併せ差引で約 66 万円減となりました。

支出（経常費用）につきましては、直接的に公益事業にかかわる費用が約 70 万円減となりました。各種費用の対前年プラスマイナスはあるものの、額としては大きい変動がなく今後も引き続き無駄遣いをしないという基本姿勢で参ります。

当協会が行う事業は、定款で公益事業のみを行うこととし収益事業は行いません。結果として収入の大半は企業会員や個人会員の会費収入で賄っています。本年度に予定した各種事業は概ね順調に消化いたしました。

会員状況について

法人会員：

協会の活動と財政基盤を支える法人会員の数は、2017 年 3 月末現在 123 社（2016 年度期初 122 社）です。在インド日系企業は 2015 年 10 月調査では 1230 社でしたが、2016 年 10 月には 1305 社になっています（在印日本大使館）。進出企業の拠点数も、ハリヤナ州、カルナタカ州、タミルナド州を中心に 4417 か所から 4599 か所へと増えており、これからも法人会員増加の余地は少なくないと考えられますものの、現地情報へアクセスするチャンネルも多様化しており、協会の会員増には直ぐに結びついていないのが実情です。

個人会員：

2017 年 3 月末現在、昨年 3 月より差引 26 名減の 422 人です。高齢化とともに古くからの会員の退会が目立つようになっておりますが、学生会員は 23 名（3 増）、インド人 45 名（2 増）と微増であることから、今後学生や在日インド人にも積極的に働きかけることも有効と考えます。全体の目標は 2017 度も 500 人を掲げて努力したいと思います。

その他《新事務局体制について》

事務局内で人事異動がありました。渡邊恭子職員が 2016 年 12 月に退職しました。新たに 2016 年 10 月より玉岡善美職員が加わり、2017 年 1 月から正職員として主に故渡邊職員の職務を引き継いでおります。併せて、2017 年度内のことではありますが、5 月 31 日付けにて宮原事務局長が退任し、6 月 1 日に西本参与が事務局長に昇格することが報告されました。

II. 評議員会

2016年6月19日(月)15:00~16:00、同じく国際文化会館にて、8名の評議員のうち7名の出席により開催されました。評議員会の議案は次の通りです。



評議員会の議案

- 第1号議案: 評議員会議長の選出の件
- 第2号議案: 議事録署名人の選出の件
- 第3号議案: 2016年度事業報告書の承認に関する件
- 第4号議案: 2016年度決算報告書の承認に関する件
- 第5号議案: 理事交代に関する件(決議事項)
- 第6号議案: 日印協会役員報酬等規約変更の件

第3号議案と第4号議案は理事会同様の内容を報告し評議員に承認されました。第5号議案は、槍田理事(副会長)の退任に伴い、後任として鈴木慎(まこと)氏が理事に就任することが承認されました。議事終了に当たり、議長より全ての議案が適切に審議された旨発言があり、議事録署名人2名ならびに議長の3名が議事録署名することが確認され、全議事を終了しました。

なお、本評議員会の後に開催された理事会(電磁記録式)において全員賛同で鈴木慎理事の副会長就任が決定されました。

2. 聖なる奇祭ラタ・ヤトラと祇園祭を考える旅 Path Reports from India

日印協会 事務局長 西本達生

一昨年に、インドに進出する日系企業の団体である、インド日本商工会(本拠地デリー、以下JCCII)の事務局長を退任するまで、現役時代も含め足掛け9年デリーに滞在いたしました。そして、日印協会 参与を経て本年6月に事務局長を仰せつかりました。



<写真:インド日本商工会事務局長で後任の河野事務局長(右)>

帰国後も、本年3月まで3カ月ごとにインド側の商工会議所関連の世話でデリーを往復してまいりましたが、訪れる度にその変貌ぶりには驚くものがあります。原稿執筆中に、いわゆるGST(Goods and Service Tax)という国家統一の画期的な新税制が7月1日よりスタート、かと思えば他方では、牛肉禁止令や、本年4月に主要幹線道路500m以内に前ぶれなくドライゾーンを設けリカーライセンス没収など、去年の高額紙幣廃止と同様、モディ政権の大胆な政策が相次いでいます。また、マクドナルドのほとんどの店が突然閉店(これはオーナーのフランチャイズシップのトラブルが原因のようだ)などこれも在留邦人の生活に直接かわる変動がありました。

筆者は、6月20日から29日までデリーとプリー(オディッシャ州)に出張してきました。

今回の訪問についてはせっかくの機会ですので、限られた範囲ではありますが、日印協会の法人会員企業訪問の<ビジネス編>と題し、日印協会法人会員企業様訪問の様子を。そして、<文化編>ではオディッシャ州プリーで年一回開催されるラタ・ヤトラ Ratha Yatra(Rathaは神様の乗り物 Chariotで日本では山車にあたります。YatraはJourney、日本では巡行のことで、祇園祭のルーツという説があります)に参加した模様をお伝えします。さらに付録として9年間の滞在中に100回以上訪問したデリーにある国立博物館で、筆者が最も好意を寄せている女神チャムダーに会ってきた様子をご紹介します。

何をさておき到着の日に日本大使館にて平松賢司大使を表敬、日印協会事務局長就任のご挨拶と今回、平林博日印協会理事長の著作本『最後の超大国インド』を理事長名代として手交いたしました。その際大使からは「まだインド進出を逡巡している企業トップの方々に、ぜひ進出の決断を仰ぎたい。いつまでも暑い、汚い、相手が手ごわいなどと言わないで、『最後の巨大マーケット』に出てほしい。そして、インドから中東アフリカに延伸の機会を見据えてください、応援します」との大変力強いメッセージをいただきました。大使ご発言の『最後の巨大マーケット』と、当日印協会平林理事長著作タイトル『最後の超大国インド』とが重なります。また平松大使は、訪日インド人現在年間12万人を2020年に10倍にと目標を掲げておられます。日印協会としても、この目標達成に寄与出来ればと思うところであります。



<ビジネス編>

本編では最初に、大使館 曾根健孝経済公使、伊藤宏書記官と、筆者がお世話になった JCCII の成清正浩会長（インド住友商会长兼社長）、小西正純元会長（双日インド社長）、滝靖夫理事（全日本空輸インド支配人）中條一哉理事（JETRO ニューデリー事務所所長）の皆様と経済活動の現況について活発に意見交換をさせていただきました。この準備をしてくださった前在インド日本大使館大島法子書記官（現 EU 代表部勤務）に感謝申し上げます。

このビジネス編では、インドで活躍の日系企業のうち当協会の法人会員であり且つ、今もインドにとどまり奮闘されている旧知の代表の方々を往訪し、その「勇気」と「元気」を後に続く企業に分けてもらえればとの意図で取り上げさせていただきました。ほかにも健闘されている協会の法人会員企業がありますが、今回は旧知ゆえそのアゴ取りが容易であった企業を優先させていただき、日程と誌面の制約から限定的になってしまいましたことをお許し願えればと存じます。

製造業では業種別にそれぞれ、マルチスズキ、日立インド、パナソニックインド、ヤクルトダノンインドを、金融機関ではみずほ銀行、政府機関としては JICA インド事務所、JETRO ニューデリー事務所の皆様から貴重な話を伺うことができました。政府系機関から先に紹介します。

JICA インド事務所を往訪、坂本威午（たけま）所長、上町透次長、丹下能嘉（たかよし）次長から、日本で初めての ODA 相手国がインド（1958 年）であることはご存知の方もおられるでしょうが、総額 5 兆円にのぼり金額ベースで現在、相手国世界ダントツ 1 位である対インド ODA の現状についてブリーフィングを受けました。

具体的には、インドの運輸・水・電力などインフラ整備という大事業から、森林保全・気候変動対策支援、観光資源保護、人材育成と女性活躍支援、農業支援ではシタケ栽培による農村貧困対策支援にまで及ぶ内容を披露いただきました。運輸セクターでは、官民挙げてデリー - ムンバイ貨物専用鉄道（DFC）が着々と進み、またムンバイ - アーメダバード高速鉄道（HSR）は 9 月にも、安倍首相訪印で起工式を迎えることが報道されています。

パワー全開の坂本所長の「これまで日本はインドから学んだ、今後はインドに恩返しを」というメッセージを披露させていただきますが、所長のパワーに終始圧倒されて、筆者はその口数においてインド人相手よりもさらに劣勢に回ってしまったことをいまだに悔いています。



<写真：左から 3 人目が曾根経済公使、一人おいて右が成清 JCCII 会長>



JETRO ニューデリー事務所では、中條所長に続きビジネスサポートセンターの大穀宏アドバイザーに話を伺うことができました。筆者は 2006 年に現役の会社の初のインド進出時に、当サポートセンターで 6 カ月間お世話になって円滑な現地法人立ち上げを実現することができ、現在も足を向けて寝られない存在です。



最近の進出企業の実態と、今回訪問のタイミングが 7 月 1 日施行のまさに“GST 前夜”であったことから、その実感を探りました。大きくは日系企業にとって実質の関税負担が軽減され、州跨ぎ税がなくなりデポ倉庫が不要になり、実効税率が低減されるものもあることから、インド経済も刺激されるなど有利なことが挙げられるとのご指摘をいただきました。

またある商社社長は、しばらくは多少の混乱もあるが日系企業としても静観していると基本的には歓迎基調でした。ただし 6 月新車販売は、GST で税率が下がることを見越し買い控えが起きたり、税率の微妙な違いで売れ筋の車種が変わるのではなどの予測が出ており、こういった多少の混乱は日本の消費税導入時にも見られた現象で、当面はインドの会計事務所は多忙を極めて潤うのではないかと、酒の肴の話題にしました。

<日印協会法人会員 企業訪問記>

●MARUTI SUZUKI INDIA : スズキ本社の鈴木修代表取締役会長には、日印協会の副会長を務めていただいておりますが、インドの会社においては、筆者が奉職していた JCCII の副会長も務めていただくなど公私にわたるご縁で、鮎川堅一社長兼 CEO (写真右、本社副社長) に時間を割いていただくことができました。



日系に限らず、インド進出企業の中で最も成功していることは誰の目にも明らかであります。今回、多くの困難に直面されてきたこれまでの話しとともに、益々活気のある現在の姿と次を見据えた将来の計画を披露いただきましたが、視点がとにかく広くて長いという印象でした。

現時点でインド国内年 300 数十万台 (商用車除く、日本は 500 万台を切っていますから追い抜かれる先が見えていますね)、そのうちの実に 160 万台を占める 47% のシェアです。そのダントツの背景には、いま現在も相次ぐ欧州車、韓国車さらに中国からの新規参入と戦いながらも盤石な体制を築く姿がありました。そのサクセスストーリーはほかの機会でも十分披露されていますが、決して平坦な道を進んだわけではありません。

1983 年以降トップを維持していますが、その販売においては並々ならぬ努力の賜物、他社が一朝一夕では成しえない販売体制構築が進んだ結果といえます。具体的には現在の戦略として、地方でも JAF 並みのサービスが受けられる“モバイルサービス”、60 万カ村の農村戦略として“ルーラルマーケティング”展開、並行して都市部で NEXA 販売店を通じての“高級路線への移行”が着々と進んでいます。特にセダンの Ciaz は高級車カテゴリーにもかわらず、小型車市場といわれてきたインドでなんと単月売れ筋車種のトップを続けており、インド発のインド向けコンセプトが奏功しているといえます。

他方生産供給体制では、グジャラート州の第三工場増設により 2020 年に 200 万台、題して“20 20 20”(2020 年 20Lakh) という目標を掲げています。

鮎川社長にうまく行くコツを尋ねましたが、ナショナルスタッフの優秀さを一番に挙げられたことが印象的でした。同社は国営企業との合弁というその出自から、本来優秀な人材が集まりやすいとは思いますが、日本からの社長がインド人従業員を大事にしてきたことは、すべての日系企業にとって成功のカギの一つと言っても過言ではありません。

次にあげる今回訪問した企業の事例にもそのカギが観られました。以下に続けてご紹介いたします。

☞Panasonic India：野中達行取締役と Panasonic 本社から常駐の三原陽子インド・南アジア・中東阿(以下 ISAMEA、阿はアフリカ)事業推進室長にお目にかかりました。残念ながら旧知の伊東大三 ISAMEA 総代表兼インド社会長(本社常務執行役員エコソリューションズカンパニー上席副社長)はご出張中で、ほとんどインドから海外に出ておられ、お目に掛かることが出来ませんでした。



同社では ISAMEA と名付けインドから南アジア・中東・アフリカを攻めるという先駆的かつ具体的な戦略が特徴と言えます。スナップの背景にある地図の緑色の地域からも伺うことが出来ます。中東のインド人ネットワークはよく知られたところですが、アフリカのそれも相当研究されている様子が見て取れました。そこでアフリカではどこに家電、どこにケーブルなどを売っていくかについて商品と地域の焦点を見定めているわけです。

特筆すべきはインドを起点にした商品分野が国内と比肩するほど多角化(家電、エコソリューション街づくり関連設備、セキュリティ、モバイル、蓄電池など)しており、その開発体制がハリヤナ州ジャッジャールとカルナタカ州バンガロールにある 2 拠点の R&D センターで、インド仕様をインド人技術者が開発に参画していることです。具体的には、サリーが洗えるモード、カレーのシミが落ちるといったカレーモードやインド料理特有の油モードを備えた洗濯機、南インド重点の蒸し機能重視の炊飯器、インド人好みの低音を効かせたスピーカーを備えた液晶テレビ、AI でオーナーの生活機能を判断するスマホ、何千万円もの費用をかける富裕層の結婚式向けプロジェクトマッピング、インド政府の EV 車宣言に呼応した蓄電池事業など超が付くほどの多角化といえます。

他方ナショナルスタッフの登用も進んでおり、かつてイベントで筆者がパネラーとして一緒したことのあるパナソニックインド社長のマニッシュ・シャルマ氏は本社の執行役員にも迎えられているとのこと。

☞インドヤクルトダノン：インド在職中にお世話になった畠田実社長を往訪しました。同社は 2008 年に、デリーから北に約 50km 離れたハリヤナ州ソニパットで生産を開始しました。当初はデリー首都圏での販売でしたが、徐々にインド全土に拡大して今では、ムンバイ、バンガロール、コルカタ、チェンナイ、ハイデラバード、アーメダバード、プネのいわゆる Tier1 と呼ばれる全ての主要都市に供給しています。1 本 12 ルピー(約 20 円、購買平価で 100 円の間、対し日本国内は 40 円)です。デリーの工場から全国各地に供給できるのは、低温物流網(コールドチェーン)の確立があると思います。インドの食品加工省も大いに注目しているところで、筆者在職中にも日本大使館を通じ当時の次官からコンタクトがあったことを思い出しました。



<写真：右端がヤクルトレディで一家を支える>

当初は、伝統的に家庭で作る食材のダヒ(固形プレーンヨーグルト)やラッシーと混同され、「なにも外国乳製品はいらないよ」との反応で非常に苦労された。そこで、日本と同じヤクルトレディ方式で、ロコミ直接販売によるヤクルト独自の乳酸菌「シロタ株」の整腸作用や免疫改善効果を地道に説明して回った。またコルカタの 4,000 人の児童に対して飲用試験を実施し、急性下痢症の予防効果があることを実証したとのこと。その間 5 年を要しています。畠田社長からは、「女性の採用を増やし、人々の健康を支えると同時に女性の社会進出を支援していきたい。経営はまだ苦しいが、彼女たちの生活水準が改善され笑顔を見ることで、かえって勇気が湧いてくる」「インドでは病気の予防意識がまだ低く、「日頃の予防が重要」「腸を健康に保つことが長生きにつながる」という考え方を浸透させる」そして、「小さなヤクルト」が「大きなインド」に挑戦していく姿を追っていききたいとのこと。最後に 10 年生修了と決して学歴が高くない女性が、自家用車を買えるまでになったというほほえましい家族写真を畠田社長にいただきました。

⇒みずほ銀行ニューデリー支店：チェンナイ支店長を経てこの4月から二度目のデリー赴任をされた黒木順ニューデリー支店長を往訪しました。筆者は現役時代 2006 年からお世話になっておりました。同氏は最初のデリー勤務のあと帰朝されてもインド室長として日本からの投資を後押しされたので、いわばインド投資専門家と言える存在です。



同氏によると、かつては大企業のみと言っても過言ではなくそのインド進出比率は80～90%でしたが、この数年は中堅企業の進出も目立ってきました。他方中国やベトナムにおいては逆パターンで、依然中小企業が80%を占めています。まだインドは中小にとってハードルが高いという意識はありますが、その環境を整えるべきサポート体制ができつつあることを説明いただきました。具体的には製造業にとって難題であった工場用地で、インフラまで完備した工業団地の整備が複数進んでいることは心強い限りです。

⇒日立インド社：菅田善博 COO、窪田国雄 GM、丸尾陽司 GM と6月から就任されたばかりの旧知のバーラット・コーシャル社長にお目に掛かりました。彼は日印両政府による共同タスクフォースのメンバーの経験を持つ日本の良き理解者です。



<写真：菅田 COO（左端）、右から2番目がコーシャル社長>

同社は、インド政府が掲げる「Make in India」「Digital India」「Smart City Mission」を推進し、人々のQOL(Quality of Life)向上に貢献というコンセプトを掲げておられます。具体的にはOT(制御技術)とIT、多彩なシステムを組み合わせた「社会イノベーション事業」といっても難解ですが、IT事業・水事業・鉄道システムなどで高度な社会インフラ構築に集中して取り組んでおられ、インドの成長に貢献するというメッセージを揮うことができました。

<文化編>

ここからは<文化編>と題し、ヒンズー教の四大聖地のひとつ、オディッシュ州プリーのジャガンナート寺院で年一回行われる、山車の巡行行事に参加した様子をお届けします。毎年ヒンズー暦の三月 Asadha のモンスーン時期(例年太陽暦で6月から7月にかけて、今年は6月25日がメイン本宮でした)に行われ、わずか100m幅で3kmほどの大通りを巡行するのに、ピーク時には100万人が神様にすがる思いでわれ先に押しかけ、圧死者(これで功德を積むといわれる)も出るとのことです。今年は報道によると、幸い怪我人で済みました。下左の写真は地元紙に掲載された、前日のいわゆる本宮祭りで3台の山車が勢ぞろいした様子、下右はエア・インディアの機内誌にあった昨年(2014年)の状況で、いかに近寄りたがいかがわかります。筆者はその本宮祭りの翌日、まだその余韻が残る日に渋滞の車列をかき分け辿りつくことが出来ました。そしてケガもなく無事戻ることが出来ました。



先ずヒンズー四大聖地であるジャガンナートのおさらいですが、Wikipedia で恐縮ながら次の記載があります。

ジャガンナートまたはジャガンナータ（梵: जगन्नाथ、オリヤー語: ଜଗନ୍ନାଥ、Jagannāth(a) ; 「世界の主」の意）はヒンドゥー教の神である。元はインド洋東岸オリッサ地方の土着神だったが、後にヒンドゥー教に習合されヴィシュヌ神の化身の一つであるクリシュナと同一視されるようになった。オリッサ州の海辺の町プリーにあるジャガンナート寺院（Jagannāth Mandir）の本尊として、兄バラーマ（बलराम、ବଳରାମ、Balarāma）、クリシュナと共にヴィシュヌの化身の一つ）、妹スバドラー（सुभद्रा、ସୁଭଦ୍ରା、Subhadrā、アルジュナの妻）と共に祀られていることでも有名である。この地はヒンドゥー教四大聖地の一つに数えられている。祭では、ジャガンナートら3人を載せた豪華な装飾が施された巨大な山車（ラタ、ରାତା）が大通りに出され、グンディチャー寺院（Gundichā Mandir、ଗୁଣ୍ଡିଚା ମନ୍ଦିର）までの約2.7kmの道程を練り歩く。この祭りはクリシュナの故郷帰還を記念するもので、ジャガンナートたちは行進の道すがら、彼らの寺院を建ててくれたおばグンディチャーの家であるマウシマー寺院（Mausimā Mandir）を表敬訪問し、そこで彼の好物であるポーダ・ピター（ପୋଡ଼ା ପିଠା、poda pithā、関西風お好み焼きに少し似た、オリッサ地方の粉もの料理）を振る舞われ、グンディチャー寺院に7日間留まった後、再びジャガンナート寺院へと帰っていくとされる。この神聖な行列を観た者には福德があると信じられており（ଦର୍ଶନ、darśana、ダルシャナ）、山車の周りは毎年大勢の人々でごった返している。また この祭事が京都の祇園祭の原型になったとも言われている。

ここはヒンズー教徒しか参拝が許されないというほどの聖地です。本尊は写真のようにまことに愛くるしいものです。

以下に、今回運よくガイジンの特権を活かし、山車に触れることが出来る距離まで近づくことが出来ました。その実況中継で読者の皆様に興奮をお伝えできればいいと考えますが、百聞の下手な説明より、写真を見ていただくことが最も有効と考える次第です。

ここで登場する山車の機材は、聖なる山から切り出されたご神木で毎年新たに作られるのだといひます。そこが日本の祇園祭とは異なります。ほかにも洛中洛外図屏風にも描写のある日本の祇園祭には、その装飾としてインドカシミアやペルシャゆかりの絨毯マットや更紗が大切に保存されて纏っています（前田専學氏監修「インドからの道 日本からの道」の中にある染織家吉岡幸雄氏の著述）が、インドの場合はこれも毎年新調されるとのことで、この点も異なります。装飾の描き方などは非常に丁寧で、信仰心の高さが窺い知れます。



<写真：右端がジャガンナート、左端が兄で真ん中が妹
国立民族学博物館のホームページから>



左写真の山車には、ジャガンナート神が乗っています。お坊さん数十人も乗っており、いくつもの鐘を鳴らしながら大勢の人がロープを曳いて進みます。一回に数十メートル進むと大きな銅鑼がなり、そこでいったん止まります。安全運転ですね。あまりの盛り上がり気分の高揚を抑えることができなくなるほどでした。引き手に志願する度胸ありませんが、そこはヒンズー教徒の邪魔をしてはならないと自制しました。そして、敬虔な祈りを捧げる人々に感動しました（写真右）。



ここで、京都の祇園祭の写真にも登場してもらいましょう。

写真は <http://photo53.com/> 『京都フリー写真集素材』様よりお借りしました（写真下）。こちらは雅な優雅さを感じます。それぞれ色彩が豊かで趣が異なるのもいいと思います。

筆者の興味を引いたのは、チャクラと言われる車輪の直径がほぼおなじであることです。



実況途中で珍事がありました。左の写真の矢印に示すように、山車に乗っていた聖なる御仁が降りてきて、聖なる花を与えて下さったのです。ほかのヒンズー教徒には餅撒きのように振る舞っていたものを。そして筆者は有難いことにそれをいただきました。しかしそのあとすぐ、「少しでいいから」とちゃっかり 500 ㍩をドナーションさせられました。よくぞ壇上からガイジンを目指して降りてきたなどあとで苦笑しました。その花はデリーに持ち帰り、親しいインド人家族に差し上げたところ、これまでの 11 年の付き合いの中でもっとも感動を与えたことの一つではないかというくらい喜んでもらえました。良いことをしたと満足しました。

実況中継の最後にひとつ、右下の写真はジャガンナート神のいわゆるご神体を望遠で取ることに成功した唯一の一枚です。多少のピンボケはご容赦いただければと思いますがギョロ目が真ん中やや右に見えるでしょう。貴重なワンショットです。

以上、当初は果たして辿りつくやらと心配になりましたが、ほぼ満足のいく取材が出来たかなと思うところですが、帰途の途中の車内で思いめぐらせたことは、「どの道を通して日本に伝わったのか」「蓮華菩薩がアジャンタから法隆寺に伝わった痕跡は、敦煌などシルクロード経由で伝わったのはほぼ間違いない」「しかしこの山車の巡行はどうやら海路ではないか」「ネパールにも現存するらしいが、スリランカやミャンマー、タイ、ベトナムに伝わらず、なぜ日本に」など疑問を繰り返しながらの旅でした。



<写真：ラタの中のジャガンナート神>



<写真：(左) 兄バララーマの山車、車輪の大きさは直径2mほど。(右) もう1台の山車。ジャガンナート含め、山車は計3台>

<チャムンダーとの再会>

於：デリーNational Musium 国立博物館

次に、筆者がお気に入りのチャムンダーと久しぶりの再会の様子をお伝えします。

遠藤周作著「深い河」に出てくることをご存知の方も多いと思います。筆者は、その言われに心を惹かれたこともあります。たまたま「深い河」に登場するツアーガイドの江波氏のモデルになった元講談社の本人に会うことがあり、彼から遠藤周作の国立博物館での取材ぶりを聞くことで大いに関心を持ったことがきっかけでした。

写真は国立博物館内にあるものと右側が英国博物館にあるもので、それぞれ10本の腕を持ち、痩せこけた体、しぼんで垂れ下がった乳房、おなかにサソリが食いついているものもあります。左の方は人間の首をつないだネックレスを下げている。ヒトの死体の上に座っているという残酷なものです。デリーの博物館には筆者が数えただけで少なくとも11体存在しました。原則館内撮影禁止ということで、写真の掲載は必要最小限に止めます。



この神様については、専門家の解説を得たいところですが、少なくとも博物館の解説によると、人間の苦悩をすべて表しており、この女神さまがそれを背負っているのだと筆者は解釈しています。だからグロテスクと感じるよりも、なおさら愛おしくて仕方がない、100回も通い続けた理由がそこにあります。

<まとめ>

よく言われることですが、インドは奥深いとつくづく思います。こんなに暑い、汚い国ですが、なぜか心を惹くものがあります。バナナシも決してキレイとは言えない町ですが。そこでガイドを引き受けてくれたインドの友人が「なぜこんなに汚いの？」との質問に、「ヒンズーの教えは、あるがままに なんだよ」との返答、ホントにそうかと別のインド人に訪ねたら、「それは違う、単にルーズなだけ。道徳を学んでいないだけ」と言う。この議論は何が答えか、永遠に見つかりそうもありません。

しかし事実として、いくつもの宗教や哲学が生れたり、他方ではIT技術者やNASAの技術者(職員の4割がインド人ともいう)、世界的なIT会社・金融機関のトップなどを輩出していることもインド人の優秀さを示すものです。

数学者藤原正彦氏の著作『国家の品格』に、いくつもの数学の定理を発見したラマヌジャンについて紹介されています。そこには藤原氏がどこに行ってもすさまじく汚いインドで、彼の持論である、数学の定理は若い時に美に触れた経験を持つことが重要との考えに合致するところを見つけたとあります。実際に藤原氏がインド、つまりラマヌジャンの生まれ育ったところへ行ってみると得心したとのことでした。そこは、チェンナイの南2百数十キロ、クンバコナムというところ。クンバコナムの周辺からは、理系の方ならご存知の「ラマン効果」で有名なラマンもこの近辺の出身とか。じつに奥深いですね、インドと言う国は。

3. インドニュース (2017 年 6 月)

News from India

1. 内政

【 कांग्रेस党動向】

6月6日

- कांग्रेस党は、党の最高決定機構である党作業委員会を開催し、10月に同党総裁選挙を実施することを承認した。

【大統領選挙関連】

6月7日

- ムカジー大統領の任期終了(7月24日まで)を受け、選挙管理委員会が第15回大統領選挙に関するプレスリリースを発表した。主な日程以下のとおり。

投票日 7月17日(月)

開票日 7月20日(木)

6月19日

- アミット・シャーBJP総裁は、ラーム・ナート・コヴィンド・ビハール州知事をBJP率いるNDA政権の次期大統領候補者として指名した。本件決定は、19日に行われたBJP議会理事会の後になされた。シャー総裁は、「モディ首相は、本件につき、ソニア・ガンディー・ कांग्रेस党総裁、マンモハン・シン前首相その他の政治指導者に通知した」、「コヴィンド氏の候補についてコンセンサスが得られることを希望している」と述べた。

(メモ) コヴィンド氏は、ウッタル・プラデーシュ州カンプール・デハット出身の71歳(1945年10月1日生)。ダリットの指導者であり、現在ビハール州知事を務める。政界進出前は弁護士として従事。1994年から2006年にかけて、BJP党員として連邦上院議会議員を2期連続務めた。

【連邦議会】

6月13日

- モンスーン国会の会期を7月12日から8月11日とするプロポーザルが議会省内閣委員会に提出された。

【北東部の開発】

6月15日

- マハジャン下院議長は、マニプール州インパールにおける第16回北東部連邦議会連盟会議において、インドは北東部の発展なしには発展できないと述べ、連邦政府は「アクト・イースト」政策に高い優先度をつけており、北東部は重要なパワーセンターとなる潜在力を有していると述べた。

【副大統領選挙】

6月29日

- アンサリ副大統領の任期終了(8月10日まで)を受け、選挙管理委員会が第15回副大統領選挙に関する主な日程を発表した。

候補者の締め切り 7月18日(火)

投票日 8月5日(土)

開票日 8月5日(土)

2. 経済

【物品・サービス税（GST）】

6月3日、11日、18日

- 6月3日、GST委員会の第15回会合が開催され、前回会合では未定であった貴金属（金・銀）、ダイヤモンド、ビスケット類、繊維及び靴等に関する税率を決定した。
- 6月11日、GST委員会の第16回会合が開催され、業界からの意見を踏まえこれまでに決定された税率に関しレビューが行われた。軽減が求められていた133品目に関し、66品目の税率が下方修正され、小規模の企業やレストランのための譲歩的な納税スキームの対象範囲が拡張された。
- 6月18日、GST委員会の第17回会合が開催され、宝くじに対するGSTの税率が設定された他、観光客の多い州からの要望に応じてホテルの宿泊サービスに対する税率が修正された。また、低下したGST税率から得られる利益を製品価格の引下げに反映することを企業に求める反不当利益行為ルール(anti-profiteering rules) が承認され、今後、この企業を検査する常設委員会が設置される。GSTは7月1日から導入予定。

3. 外交

【インド・ロシア関係】

5月31～6月2日

- モディ首相はロシアを訪問し、サンクトペテルブルク国際経済フォーラムに出席したほか、印露首脳会談が実施された。また、原子力協力等に関する合意文書が交わされたほか、サンクトペテルブルク宣言が発出された。

【インド・フランス関係】

6月2～3日

- モディ首相はフランスを訪問し、マクロン・フランス大統領と会談した後、共同プレス発表を行った。

【インド・スリランカ関係】

6月6日～7日

- カルナナヤケ・スリランカ外務大臣が訪印し、モディ首相を表敬したほか、スワラージ外相と会談した。

【上海協力機構アスタナ首脳会合】

6月8～9日

- モディ首相はカザフスタンを訪問し、上海協力機構（SCO）アスタナ首脳会合に参加した。今次会合において、インド、パキスタンの正規加盟が決定した。また、同会合に併せて、モディ首相は、ナザルバエフ・カザフスタン大統領、習近平中国国家主席、ミルジヨーエフ・ウズベキスタン大統領、ガーニ・アフガニスタン大統領それぞれと会談した。

【インド・カナダ関係】

6月19日

- モディ首相はトルドー・カナダ首相と電話会談を行い、両首相は、特に気候変動における相互利益の発展について意見交換を行った。モディ首相は、インドがパリ合意の実施を進める努力をすることを再確認した。

【インド・ポルトガル関係】

6月24日

- モディ首相はポルトガルを訪問し、コスタ・ポルトガル首相と会談した後、プレス・ステートメントを発表したほか、宇宙分野における提携等の合意文書が署名された。

【インド・米国関係】

6月26日

- モディ首相が米国を公式訪問。同日に、米印首脳会談、共同記者会見、ワーキングディナー、ティラソン国務長官、マティス米国防長官のモディ印首相表敬が行われた。

【インド・オランダ関係】

6月27日

- モディ首相は訪蘭し、ルッテ蘭首相と会談した後、印蘭共同コミュニケが発出された。両首脳は、テロとの戦い及び過激主義の防止にコミットすることを再確認したほか、オランダはインドのNGSへの早期加盟及び国連安保理常任理事国入りを支持した。

4. 日印関係

【インド高速鉄道に関する第5回合同委員会】

6月14日

- 東京において、インド高速鉄道に関する第5回合同委員会が開催された。
- 第5回会合の日本側代表団には、日本側の共同議長を務める和泉洋人内閣総理大臣補佐官を団長として、関係各省（外務省、財務省、経済産業省、国土交通省）の次官・局長級幹部が参加し、インド側代表団には、アルビンド・バナガリヤ行政委員会副委員長（インド側の共同議長）を始め、鉄道省、外務省等の関係各省の次官級が参加。
- 第5回合同委員会では、プロジェクトの円滑な推進のためのモニタリングの仕組みについて議論するとともに、メイク・イン・インド（インドにおける現地生産）や人材育成など、ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道計画の進捗が確認された。また、本年あり得べき首脳会談に向けて、両国間で作業を行っていくことで一致。
- 日本政府としては、ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道への新幹線システムの導入の実現に向け、引き続き両国間で取り組んで行く考え。

今月の注目点：日印原子力協定

6月7日、日印原子力協定は、参議院本会議において可決され、国会による承認を得た。

【背景】2008年、インドは「約束と行動」と呼ばれる核実験モラトリアム等の政策を表明し、原子力の平和的利用を進める固い決意を表明。これを前提として、原子力供給国グループ(NSG)は、核兵器不拡散条約(NPT)を締結していないインドへの原子力関連資機材等の移転を例外的に可能とする旨を決定した。これまでに米・仏を始めとする9か国がインドとの原子力協定を締結している。インドでは、2022年には世界一(約14億人)となる人口増加と経済成長が見込まれ、高い電力需要がある。インドは、2050年までに総電力供給の25%を原子力とすることを目指し、高い技術を持つ日本との協力を強く希望していた。

【主な内容】両国間の原子力の平和的利用分野における協力を実現する上で必要となる法的枠組みを定めるもの(特定のビジネスやプロジェクトについて取り決めるものではない)。具体的には以下のとおり。

- ① 核物質等の平和的目的に限った利用 【第3条】
- ② 国際原子力機関(IAEA)による保障措置の適用 【第4条】
- ③ 核物質等に関する情報の交換 【第5条】
- ④ 核物質等の防護措置の確保 【第7条】
- ⑤ インドにおける再処理 【第11条】
- ⑥ 協定の終了、協力の停止、再処理の停止等 【第14条】

【意義】日印原子力協定の発効は、戦略的に最も重要なパートナーの一つであるインドとの関係を深化・拡大につながるもの。また、原子力の平和的利用についてインドが責任ある行動をとることを確保し、NPTを締結していないインドを国際的な不拡散体制に実質的に参加させることにつながる。

4. イベント紹介 Japan-India Events

=◇ 最近のイベント ◇=

◆ 【日印友好交流記念事業認定】

日印協会代表理事平林博理事長の出版記念講演会開催(日印協会主催)の様子

7月10日(日)午後3時から5時まで、六本木の国際文化会館において標記講演会を開催致しました。当日インドに負けない程の猛暑日にもかかわらず、約120名の方々にお集まりいただき、皆様熱心に聴講されました。

演題を「超大国へと発展を遂げるインド：我が国はどう対応すべきか」と題し、元駐インド大使およびその後の日印協会理事長の立場で20年近く日印関係を目の当たりにした事実に基づいた内容で、過去 - 現在 - 未来へと縦横斜めの視点から言及し、迫力のあるものでありました。

千年以上続く日印交流と、近代における先の大戦前後の深い絆、そしてモディ政権以降の安倍政権とのさらなる日印関係深化について触れており、特に平林理事長が駐インド大使時代の困難な関係には、当事者でしか述べることが出来ないエピソードも披露されました。

途中には日印の文化的繋がりや現在の経済交流に関する話題も盛り込まれ、ご参加の皆様がインドに関わった時代と重ねあわせ、それぞれ感慨に浸り聞いておられた様子が大変印象的でした。

最後にジャーナリストや研究者の方々との活発な質疑応答がありましたことも申し添えさせていただきます。



◆ ナンダ・コート初登頂 80 周年記念事業—立教大学で遠征隊 壮行会

『月刊インド』6月号でご紹介した、ナンダ・コート初登頂 80 周年を記念する齋藤町遠征隊の記者会見ならびに壮行会が7月4日（火）、立教大学において開催されました。

「陽光に輝く雪上から視界を遮るものがなかった。」1936年（昭和11年）10月5日午後2時55分、日本初のヒマラヤ遠征隊である立教大学山岳部がヒマラヤの未踏峰「ナンダ・コート」に登頂を果たして81年。同大学のOBらによって結成されるナンダ・コート再登頂を目指す遠征隊の壮行会が、立教大学において行われました。壮行会は、構内のチャペルで挙行され、隊員は全力を尽くし登頂を目指すことを誓いました。

壮行会に先立って、遠征派遣の記者発表が行われ、併せて記録映画『ヒマラヤの聖峰 ナンダ・コット征服』の上映と、アルピニスト野口健氏の講演も開催されました。

遠征隊は9月17日に日本を発ち、10月5日の登頂を目指します。1936年に埋められた立教大学校旗、毎日新聞社旗、日章旗を探し、先人達の足跡を辿ります。昭和初期、登山に対する情報が少ない中、ドイツ人登山家の記録を翻訳するなど、地道な研究が実を結びました。当時と比べ、物や情報に恵まれた今日でも、生物の存在しない神の領域である遥か高みを目指す気概と情熱が、変わる事はありません。

登頂後、壮行会でも上映された記録映画をベースに、登頂に埋められた旗を探す遠征隊の様子をドキュメンタリーとしてテレビ番組化されることが予定されています。

壮行会の様子は、毎日映画社のホームページでもご覧いただけます。
毎日映画社ホームページ <http://www.mainichieiga.co.jp/>



<写真：壮行会の様子（立教大学チャペルにて）>



<写真：記者会見の様子>

（本文・写真：日印協会 職員 玉岡善美）

◆ 日本の絵本の読み聞かせで “クリーン・インディア” に貢献

都市部の廃棄物量では世界第3位を誇り、年間1億トン出るゴミの40%が放置されているインド。その他インドが抱えるゴミや汚染に係る諸問題を解決するために、インド政府は“クリーン・インディア”を掲げ2兆円を投入し国を挙げてキャンペーンをしています。しかし、どんなにトイレを設置し街を清掃しても、人々の意識が変わらなければ問題の根絶はできません。そこに目をつけ、JICA から支援を受けインドで日本の絵本の読み聞かせによる啓蒙教育活動を始めたのが、株式会社講談社のプロジェクト・マネージャーの古賀義章さんです。



インドの未来を担う子供たちから意識を改革することを目的に、環境教育をテーマにした日本の絵本『もったいないばあさん』（真珠まりこ 著）の読み聞かせキャラバン隊が各地を回っています。首都デリーから UP 州のバラナシまで、ヒンディー語訳の『もったいないばあさん』は、様々なバックグラウンドを持つ子供たちに読み聞かせられ、子ども達からは「Mottainai」の大合唱が起きました。この活動の一部は、NHK でも紹介され、読み聞かせに聞き入る子ども達の姿が日本のテレビでも放映されました。

(写真提供：古賀義章 株式会社講談社 プロジェクト・マネージャー、本文：日印協会 職員 玉岡善美)

◆ PIITs>I コンソーシアム異文化 PBL (Project Based Learning) が開催されました

7月8日(土)にPIITs (Project Indian Institutes of Technology)、GTI (Global Technology Initiative) 共催の異文化 PBL が芝浦工業大学の豊洲キャンパスにて行われました。今イベントは、IIT 学生と国内大学生の交流を図り、「異なる背景を持つ人たちと上手に討論し、建設的な解決策を作り上げること」を目的としています。今回取り上げられた課題は、「2020年、東京でオリンピック・パラリンピックの開催において、日本人、外国人を問わず、東京を訪れる人々のためのより良い画期的なアイデアは何か?」。IIT (Indian Institute of Technology) の学生 11 名の他に、日本の大学からは 6 大学 (東京電機大学、神田外語大学、東京都市大学、芝浦工業大学、宇都宮大学、津田塾大学) 計 48 名参加しました。今イベントは参加者を、IIT 生を最低 1 名含む TeamA から H の 8 つのチームに分け、チーム内で討論し、課題に対するアイデアを出し、プレゼンテーションの形で競い合うというものです。審査員は、芝浦工業大学 学長補佐 Miralidhar Miryala 氏、毎日新聞社 教育事業部 大学センター長 中根正義氏、スポーツニッポン新聞社 東京本社副代表 浅古正則氏の 3 名が務めました。

イベントは、コンセプトの説明、アイスブレイク、討論 (グループワーク)、プレゼンテーション、審査、発表の順に進みました。アイスブレイクでは、それぞれの紹介から、ヒンディー語での挨拶を教えられるたり、日本とインドとの大学の英語教育の在り方など、話しは広がりしました。

今回取材をお願いしたチームは、IIT Ropar の 3 年生、アヌラング君、芝浦工業大学から英語通訳の学生、東京電機大学、津田塾大学からの学生で構成された TeamH。このチームは、開始から他のチームとは何かが変わりました。他のチームが粛々と既に用意された模造紙に手を付けていく中、彼らはすぐそばにあったホワイトボードを持ち出し、タイムテーブルを作成。タイムテーブルをメンバーの頭に叩き込んだ後は、ホワイトボードを裏返し(時間短縮戦略!)。今度はオリンピック開催で生じる可能性のある問題を出来る限り書き出す作業に取り掛かりました。他のチームがインターネット検索サイト、google (先生) や新聞に頼る中、このチームではメンバーの頭がフル回転しました。



<写真：ディスカッション中の TeamH>



時刻は 13 時を回りましたが、メンバーは昼食をとる事も忘れ、問題をカテゴリー別に分ける次の段階に入ります。そこで、IIT のアヌラング君から提案。「僕は IT エンジニアで、みんなは日本をよく知っている日本のエキスパートだから、みんなが提案した問題を、僕がどうシステム化して解決できるか考える！」。全ての人材が同じ事に頭を使うのではなく、適材適所で時間短縮を図る見事な戦略です。このチームで取り上げられた問題は、言語、人口過多による混雑などでした。アヌラング君からは、泉の様にアイデアが湧きだしてきます。スマートフォンの地図検索で、ある地域に検索が殺到

すると、その場所の信号がアプリケーションと連動し、青信号の時間が長くなる「信号操作アプリ」。アプリケーションに自分の言語を登録しておく、そのアプリと連動して看板が登録言語に変わる「ダイナミック・ビルボード」など。図化しながら、英語が苦手な日本人学生にも分かり易く説明していきます。2 時間 40 分という限られた時間で、何とかプレゼンテーションの制作までこぎつけました。

それぞれのチームが挙げた問題は、言語、Wifi 環境、宿泊施設、食事が最も多く、これら全ての問題を一つのアプリケーションで解決しよう！というチャレンジングなチームは 3 つもありました。グループワークを進めていく中で、それぞれのチームが違っており様ではありません。日本の学生がリーダーシップを取っていくチームもあれば、日印とリーダーが 2 名居るチーム、圧倒的統率力で引っ張る IIT の学生など。しかし、思考の論理性や、問題を明確にし、論点の整理をすることに

関しては IIT の学生が長けているようにも感じられました。

日本の学生が、細かな問題やサービスの向上への指摘が多い中、IIT の学生は、本来の論点をクリアに説明しながら学生を誘導していくような様子が見られました。また、なかなかアイデアが出てこない学生に「じゃあ、驚く程多くの人が自分の家に一気に来たときにどうするか考えてみて」と分かり易くアドバイスをしながらメンバーを巻き込んでゆく姿もみられました。



<写真：TeamH のプレゼンテーション>



<写真：参加者全員で集合写真>

今回のイベントは、限られた時間で限られた資源を使い、限られたレベルのコミュニケーションの能力内で共に最大を目指してゆくという経験を、日本の学生、そしてこれから日本で活躍してくれるかもしれないインドの学生に提供した、大変実りあるものでした。残念ながら、取材に応じてくれた TeamH は優勝することができませんでしたが、参加した学生は、「日本の学生は発信する能力がないと言われているが、今回それを痛感した。いい刺激になった！」とコメントし、IIT 生との交流を大いに楽しんだようでした。

PIITs を運営する、ウェブスタッフ株式会社で働くインド人人材をご紹介します！

とても学生には見えない風貌。IIT の学生達とは一線を画す存在感。「学生の取りまとめ役ですか？」と尋ねてみると、「いいえ、違います！仕事しています」とのお返事。興味が湧き、いろいろなことを聞いてみました。

お名前は？「ごめんなさい、名刺なくなっちゃって…」 Parikshit Chavan、ブリッジ・ディレクター、ウェブスタッフ…と丁寧に肩書き、会社名までメモ帳に書いてくれました。ウェブスタッフには入社して 1 年と 10 ヶ月。彼は、インド、ムンバイにある Victoria Jubilee Technical Institute の出身です。なぜウェブスタッフにきたのか聞いてみると「もともと日本で仕事をしたかったのだけれど、自分の大学にリクルートに来てくれたのがこの会社だけだったんだ」とのこと。インターンとして来日後、ウェブスタッフで正社員として採用に至り、学生時代の夢がかなったようです。現在は同社でディレクターとして、技術的な専門知識を使いながらマネジメントという、今まで経験のない仕事で日々精進していらっしゃいます。



こんな人材が日本にもっと増えることを願っています。

(本文・写真：日印協会 職員 玉岡善美)

＝◇ 今後のイベント ◇＝

♪交流会開催のお知らせ♪

9月6日(水)に交流会を開催致します。今年の交流会は、新宿中村屋、レストラン グランナにて行います。今交流会は、中村屋新宿本店「純印度カレー」90周年にあたり、中村屋様から参加費に特別のご配慮を賜りました。

日時：2017年9月6日(水) 18:00～20:00

会場：レストラン グランナ 新宿中村屋

新宿中村屋ビル 8階

[JR線をご利用の方] 新宿駅東口から徒歩2分

[東京メトロ丸ノ内線をご利用の方] 新宿駅A6出入口直結

参加費(飲物代込み)：会員/非会員 4,300円

締め切り：8月30日(水) 定員：50名(先着順)

お申し込みお待ちしております！

お申し込み、その他詳細は、同封のチラシをご覧ください。

स्वादिष्ट है!



インドを語る集い〈様々なインド〉第41回

今回は、溝淵茂樹氏を講師に迎え『仏教の聖地サールナート(鹿野苑)で仏教壁画を描いた日本画家・野生司香雪(のうす こうせつ)』と題してセミナーを行います。

昭和初期を舞台に、仏教の聖地サールナート(鹿野苑)で仏教壁画を描くことになった日本人画家・野生司香雪。彼を取り巻くその時代と、香雪をインドへと導いた運命の巡り合わせ。彼の生き様を通し、見えてくる日印関係を昭和初頭から現代へと紐解いてゆきます。

岡倉天心とインドの詩人でもあり思想家でもあるラビンドラナート・タゴールとの交流を学生時代に見ていた香雪は、インドへの憧憬の想いを胸に灯しました。その思いは、アジャンタ石窟の壁画模写の仕事を通し成就します。その後、日本美術院を卒業し、印度派として画家人生を送っていましたが、信仰心がさほどあるわけではなく、絵が当時格段にうまかったわけでもない野生司香雪。そんな彼が、がいかにして再びインドへと導かれ、そこで画家としての集大成を創造するに至ったか。昭和初期を生き、当時のインドをも生きた野生司香雪。2016年12月に出版された『野生司香雪—その生涯とインドの仏伝壁画—』の著者の一人でもあり、この本の制作に深く関わった溝淵氏を招き、お話し頂きます。



<写真：サールナートの壁画
実際の写真>

参加お申し込みは、E-mail、または同封の参加申込書に必要事項をご記入のうえ、FAXでお申込み下さい。お電話でも承っております。

皆様の参加をお待ち申し上げます。

日時：2017年8月4日(金) 18:00～19:30

会場：公益財団法人日印協会 事務所 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14
スズコービル2階

定員：先着30名

参加費：無料(非会員は500円)

申込み締切：2017年7月28日(金)



◆ ナマステ・インディア 2017 における日印協会の講演会のご案内

9月23日(土)に2回、24日(日)に2回、計4回、エア・インディア セミナーハウスに於て、講演会を開催致します。

皆様、お誘い合わせの上奮ってご参加下さい。

9月23日(土)

①13:00~14:00

演題「奥深きインド—魅惑的な世界遺産—」

講師：平林博（公益財団法人 日印協会理事長）

②14:30~15:30

演題「日本の絵本の読み聞かせキャラバンで“クリーン・インディア”に貢献！」

講師：古賀義章（講談社 海外事業戦略部 担当部長）



9月24日(日)

①13:00~14:00

演題「インド工科大学の学生たちと訪ねるインド神話の世界」

講師：山田真美（作家/博士[人文科学]/公益財団法人 日印協会理事/インド工科大学[IIT]ハイデラバード校 教養学部客員准教授）

②14:30~15:30

演題「ナンダ・コト初登頂80周年記念事業—只今、ベースキャンプにいます~81年目のインド遠征隊~」

『インドの聖峰ナンダ・コト』上映（1936年撮影、30分）、現地の様子を衛星電話回線で中継（予定）
講師：上遠野健一（毎日映画社）



◆ ヤマトタケル印度*万華鏡 開催のご案内

『ヤマトタケル*万華鏡—アジアに光線を放つ、剣と舞』—インド、日本、カンボジアの多彩な芸能で、様々な角度から光を当て、ヤマトタケル物語を形成する。

<出演>

インド古典舞踊 モヒニアッタム、丸橋広美 他
カンボジア大型影絵芝居 スバエク・トム、剣舞、Goddess Dance

日時：9月9日（土） 開演 18:30（会場 18:00）

場所：座・高円寺2

JR 中央線・総武線/東京メトロ東西線

「高円寺駅」北口から徒歩5分

全席指定、前売：4,500円、当日：5,000円、学生・聾/難聴者：3,500円

お問合せ先：ケララ企画 080-3013-0924、karalakikaku@gmail.com

日印協会会員には500円の割引がございます。

お問合せ時に協会会員であることをお伝え下さい。



◆ 大谷紀美子バラタナーティヤム—インド古典舞踊 開催のご案内

大谷紀美子、ルクミニ・ナオコによる生演奏のインド古典舞踊、バラタナーティヤムの公演です。

<出演>

舞踊：大谷紀美子、ルクミニ・ナオコ

音楽：本公演のためにチェンナイより来日

K.P. ヤショーダ（ナットウヴァンガム）、ビヌ・ゴパル（歌）

リジェーシュ・チェルヴィラ（ヴァイオリン）、K.P. ラメーシュ・バブ（ムリダンガム）

日時：2017年9月3日（日） 開演 14:00（会場 13:30）

場所：龍谷大学 アバンティ 響都ホール

京都市南区東九条西山王町31 アバンティ 9F

料金：3,000円

お問合せ：06-6659-3844（FAX）、kmkohtani@zeus.eonet.ne.jp（大谷）

090-6204-3691、bharata.a.co@gmail.com（ルクミニ）

日印協会会員には料金の1割、割引がございます。

お問合せ時に協会会員であることをお伝え下さい。



5. 新刊書紹介 Books Review

§ 『現代インド・フォーラム』2017年夏季号 No. 34

日印協会会員に7月3日にメール配信致しました。

協会HPでは7月10日に公開されました。

次のURLにてご覧いただけます。 <http://www.japan-india.com/forum>

特集：3年間のモディ政権を総括する

<目次>

1. 2017年ウツタル・プラデーシュ (UP) 州議会選挙結果が
インド国内政治に与えるインパクト
佐藤 仁美 (在インド日本国大使館 参事官)
2. 3周年を迎えたモディ政権への期待
—インド駐在の回顧と展望—
野口 直良 (ジェトロ 海外調査部長)
3. 日本とインド
—インド太平洋における利害関係国から地域安定要因へ—
ニディ・プラサード (ネルー大学博士課程 現在、青山学院大学博士課程)



§ 『インドから考える—子どもたちが微笑む世界へ—』

著者：アマルディア・セン 訳：山形 浩生

発行：NTT出版

定価：本体2,400円＋税 ISBN 978-4-7571-4345-6

アジア初のノーベル経済学賞受賞者である、インド、ベンガル出身のアマルディア・センは、自身が幼いころ目の当たりにしたベンガル大飢饉を題材に、飢饉の原因を食糧供給能力不足ではなく社会的要因に求め、代表作である『貧困と飢餓』を発表した。

本書は、そんなセンの専門的な著作をより深く理解するための入門書といえる。「はじめに—個人的なもの和社会的なもの」から始まる本書は、センが如何なる思考的回路を持ち、思想的背景が如何にして生まれたのかを教えてくれる。センが学生時代にサンスクリット文学と数学に同時に魅せられていたことは驚きであるが、それが彼の「現代的なツール」と「歴史的なツール」を同時に思考することができる能力の根源であることがわかる。インドを悩ませ続ける「あまりに古い話なのに (例えば飢餓) /でもなぜかいつも新しい (例えば権原・エンタイトルメント)」諸問題に対し彼が提供する解は、本書が提供するセン自身が持つ文脈を以て初めて完成するといえる。

彼の著作を手にしたことのない方も、すでに馴染みのある方も、本書は、センの思考を通じインドだけでなく世界を考察する強力な一助となるだろう。



(文責：日印協会 職員 玉岡善美)

§ 『インドの小学校で教える プログラミングの授業—これならわかる！ 超入門講座』

監修者： ジョシ・アシシュ 著者： 織田 直幸

発行： 青春出版社

定価： 本体 920 円＋税 ISBN 978-4-413-04504-9

「これならわかる！ 超入門講座」というサブタイトルが付いているように、プログラミング教育の後進国“日本”の IT が苦手な人達にもわかる「世界一やさしいプログラミング講座」です。

小学校 5 年生からプログラミングを学び始めるインドの子供たちの入門授業を参考に、「コンピュータはなぜ動くのか」から「人間と機械（コンピュータ）をつなぐプログラミング言語と翻訳機（インタープリタ）」について解説し、気軽に始められる初心者向けプログラミング実践入門まで体験させてくれます。



§ 『モディが変えるインド～台頭するアジア巨大国家の「静かな革命」～』

著者： 笠井亮平

発行： 株式会社白水社

定価： 本体 2,200 円＋税 ISBN 978-4-560-09554-6

1947 年にインドが独立して 70 年目の今年、「独立 3 年後（1950 年）に小さな町の貧しい家庭」に生まれたモディが第 18 代インド共和国首相となって 3 年が経過した。この 3 年の間にインドは大きな変革を遂げているが、そもそもインドはどこから来て、どこに向かおうとしているのか。モディとは何者で、この大国インドをどこに連れて行こうとしているのか？

モディ政権誕生後に書かれた数あるモディ本や論文の中で、この本は著者の優れた情報収集力・分析力と卓越した筆力で、独立 70 年のインドの歴史の中で特に存在感を増しているモディ首相を軸に論述する「分かり易い“インド学”の専門書」である。著者にとって「インド独立の志士～朝子」に続く力作。

「権威主義（開発独裁）を経て民主化へ移行するという新興国のよくある発展の道を辿らず、インドは一貫して世界最大の民主主義国であることを堅持しながら」、将来も「インドはリベラル・デモクラシーのもとで経済発展を実現して世界の大国として台頭すれば歴史的な快挙となる」（堀本武功著「インド 第 3 の大国」から著者引用）という道を歩んでいるが、モディはそれを実現する新しい時代の指導者として内外から注目されている。グジャラート州首相としての驚異の成功体験が全インドで可能なのか、その可能性に対する国民の期待は高い。2016 年 11 月に突如発表された高額紙幣廃止は、偽札、脱税、違法政治資金、テロ資金等を防止するための大胆な改革であった。数カ月間は経済活動に混乱を招いたものの、多くの国民はこの蛮勇とも思われたモディの挑戦は将来の安定成長の礎を築くものであると気付かされ、モディ首相を支持し辛抱強く応じた。

著者は読者を一気にモディの「静かな革命」の渦中に引き込んでくれる。インドの抱える「理想と現実」の大きなギャップに、モディは現実的な認識のもとに大胆な対応をしている。現実を重視するあまり変革が進まないというのではなく、現実を認識しつつ変革しようという強い意志を示し実行していることが高い支持率につながっている。本書は、モディ登場までの独立インド 70 年間の政治・経済・社会あるいは外交・軍事・安全保障等の変遷について俯瞰し、様々な困難に直面し紆余曲折を経つつも更なる高成長を続けるインドを予見。独立 100 周年を迎える 2047 年（あと 30 年後）にはインドはどのような国になっているか、そして年々緊密化する日印両国の関係はどのように発展していくのか、今後も歴史の節目節目に著者の卓見に接したいものである。



（文責：日印協会 参与 宮原豊）

§ 『南アジア系社会の周辺化された人々—下からの創発的生活実践—』

編者：関根 康正+鈴木 晋平

発行：明石書店

定価：本体 3,800 円+税 ISBN 978-4-7503-4510-9

政策科学の「排除と法政」論への懐疑から、この書は始まる。上からの政策は構造的改革を伴わず、根本的な問題解決には至らない。そこで本書は、こうした政策の対象となる、もしくは対象にすらなることがない「周辺化された人々」＝「下」を生きぬく、構造そのものである彼らに視線を向けている。



序章 社会的排除の闇を内在的に読み替える

第1章 イギリスにおける「アジア系」市民の政治参加

第2章 ブリティッシュ・エイジアン音楽の諸実践における「代表性」と周縁化—サブ・エスニシティの観点から—

第3章 インド系英語作家にみる排除と包摂—ジュンパ・ラヒリを事例に—

第4章 コロニアル・インドにおける「美術」の変容—神の表象をめぐる「周辺」からの抵抗—

第5章 ネパールにおけるカーストの読み替え—肉売りを担う人々の日常と名乗りのポリティクス—

第6章 ネオリベラリズムと路傍の仏堂—スリランカの民衆宗教実践にみるつながりの表現—

第7章 下からの創発的連結としての歩道寺院—インドの路上でネオリベラリズムを生き抜く—

結章 「社会的排除と包摂」論批判—ネオリベラリズムの終焉にむけて—

(文責：日印協会 職員 玉岡善美)

◇ 事務局からのお願い ◇

個人会員の皆様には、4月1日付で、「個人会員年会費納入のお願い」をお送りしております。皆様には、引き続きのご支援を賜りたく、まだ手続きがお済でない方はお早目の納入をお願い申し上げます。

お問合せは、本誌 27 頁の掲示板の最下段をご参照下さい。



◇ 事務局夏季休業のお知らせ ◇

日印協会事務局では、8月14日(月)より18日(金)までを、夏季休業とさせていただきます。

お問合せ・ご連絡等は、休業期間を避けて下さいます様、お願い申し上げます。



6. 掲示板 Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は、2017年9月15日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<編集後記>

インドを旅すれば必ずと言っていい程お世話になるオートリクシャー。その安さと気軽さにはありがたいものがあります。インドはそんなリクシャーの一大生産国であり、年間約53万台を国内向けに販売、30万台を輸出しています。主なリクシャー市場は、バングラデッシュ、エジプト、スリランカ、タイやペルーなどですが、近年、アフリカ大陸諸国の市場が急成長を見せています。その手頃な価格からは、マイクロ・ビジネスとして雇用の創出に貢献し、小回りが利くこともあり、救急車や消防車、パトカーとしても活躍しているそうです。そんな世界で活躍しているリクシャーには、地域により様々な愛称があります。バングラデッシュでは「ベビータクシー」、ネパールでは「テンパー」、タイやラオスでは「サムロー、トゥクトゥク」(写真参照)。編集子がインドのリクシャーで経験したカルチャーショックといえば、定員オーバーでの走行ではなく(インターネットやテレビで散々見ていましたので)、お巡りさんの無賃相乗りでした。そのお巡りさんは、編集子が占有していたリクシャーを颯爽と止めたかと思うと、何も言わずにリクシャーワーカー(運転手)の隣にドカッと座り顎で指示。編集子に何の断りもなくしばらく乗り回した後に乗り捨てられたのでした(勿論運賃は支払われず)。お巡りさんならその辺のリクシャーも公用車に早変わりなのですね…ナマステ、インディア… (玉岡 善美)



<写真: 左から、インドの「リクシャー」、タイの「トゥクトゥク」、インドネシアの「Bajaj」、エルサルバドル、ポルトガルの三輪タクシー(愛称は不明) >

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。



入会随時受付中



日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤一の3名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費: 個人	1口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
学生	1口(4,000円)から		学生 1,000円
一般法人会員	1口(100,000円)から		法人 5,000円
特別法人会員	1口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド Vol.114 No.6(2017年7月21日発行)

発行者 平林博

編集者 西本 達生

発行所 公益財団法人日印協会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階

Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com

ホームページ: <http://www.japan-india.com/>